美紗の会 たより

夢か現の春の愁い

西松　布咏

風そよぎ、きらきらと華やぐ春。芽吹き、光、希望、春の気配だからこそ感じる滲みるような愁い、ほんのりとした寂しさ、漂う影。出会いと別れ。

そんな春の愁いを唱って欲しいと「よし梅」の多身予さんから依頼され久しぶりに三月十四日に「春の愁いに花添えて」と題した演奏会が予定された。

その頃は梅の花が満開になり桜の花もちらほらの時だからと、心浮き立つ「ほどほどに」や「花は上野」春を待つ乙女心の「香に迷う」花吹雪の吉原で花魁の色香に迷った男の悲劇「籠釣瓶」梅がほころぶ湯島の境内で別れ話を切り出され鼠泣きするお蔦の「春浅き」馴染んだ女に去られた業平が夜の梅香に面影を偲ぶ「止めてはみたが」梅に従い桜になびく芸妓のやるせなさの「柳やなぎ」などの曲をあれこれ用意した。いつもなら間近にならないと席が埋まらないのにゲストの服部真湖さんに花を添えていただく趣向も功を奏し早々の満席でお断りするほどの嬉しい事態となった。

さあ頑張らなければと日々稽古しているうちに新型コロナがじわじわと拡散し周囲は自粛モードになって行った。ともすると三味線の音色も湿りがちになるが持ち前の意地でますます春の愁いの世界に没頭して行った。稽古に疲れテレビを付けると未だ特効薬もなく見えぬウイルスと戦っている医療団の様子や、政府や自治体の生ぬるい現状を憂い溜息をつきながらも「空は朧に薄曇り春や昔の春ならぬ月もないのに花の影…」などと唱う日々が過ぎてゆく。しかし事態はますます悪化の一途。いつもおっとり泰然自若の女将が「どうしましょう…」との問いかけに動揺したが「万全の用意をして決行しましょ！」と覚悟したものの会の前夜までキャンセルの電話が鳴り続き流石に私も眠れなかった。

当日は朝から雨が降り続き桜が開花したにも関わらず肌寒く、昼過ぎから細雪がどんよりと辺りを覆いまるで四面楚歌のような心持になったが、薄闇のお座敷でお待ち下さっているお客様の前に座した時は「花も雪も払えば清き袂かな…」と失恋し尼となって仏門に入った女が舞う「雪」のような覚りの世界で唄うことができた。

こうして春の愁いは夢のひとときで終える事が出来たが、現の憂いは日々の稽古をどう続けてゆくかであった。三密を避けるようにとのお達しだったので狭い稽古場のドアを開け放ち、対面を避け座布団の位置を遠く斜めにして稽古を続けていたところ四月三日にロスアンゼルスに住む旧知のソルト氏からメールが届いた。この緊急事態にまだ稽古をしているなら即刻やめて欲しい。他人と歌うことは話すことよりもっと危険で命に関わる。と実際に合唱団のグループがレッスンで起きた悲劇の記事を送付してくれた。

ソルト氏とは十数年前に三月八日に逝去された大野慶人師の舞踏の稽古に同行した事があり「稽古するとは日常の中で命のかたちを自らがどう捉え時代との緊張関係の中で命がけでどのように立って行くかを絶えず考えなければ無意味である」と懸命に生きることの原点を熱く語りながら弟子に稽古をつけていた慶人師に同感し感激し合った事がある。

その彼が遠くにいる私に伝えてくれた必死のメールで、翌日稽古場の閉鎖を決意した。弟子との稽古は私の毎日を生きるかたちであったから苦渋の決断だったが私の決意を快く受け止め、各々の気持ちを素直に伝えてくれ嬉しかった。

それからは私が出来の悪い生徒になってその道のプロの頼もしい弟子達に導かれ苦手なパソコンでの録音の仕方や新曲の送り方を教わりオンラインでの稽古を開始するに至った。しかしながら、各々の持ち味を大切にその時々の微妙な触れ合いのなかで稽古して行くという臨場感や「三味線と唄は言うに言われぬ間合いや幽けき音が大切よ」「相手を尊重し耳を傾けることが自分を生かすことになって行くのよ」などと言葉を交わしながらの一番大切な芸の真髄をオンラインで伝えてゆけるだろうか…恐らくそれは無理だろうという限界とどう向き合って行くか…

この春はまさしく「春の愁いの夢と現」を行ったり来たりの日々となった。

夢のひととき

己紗　秋咏

今にして思えば夢のような一日だった。

三月十四日、人形町のよし梅芳町亭で、「春の愁いに花添えて」と題した布咏先生の会が開かれた。新型コロナウイルス感染拡大により全国の学校が一斉休校。演劇やコンサートの自粛・中止もぼつぼつ出始めた時期だった。

その日、東京は桜の開花宣言が出たにもかかわらずかなりの冷え込み。「雪になるかも」と予報は伝えていた。

何度か通った路地にある芳町亭の引き戸を開けると、お店の方がいつもと変わらぬ笑顔で出迎えてくれた。違うのは大きなマスク姿だったことと、手の消毒を求められたこと。皆にプレゼントされた若女将手作りの手拭いマスクが洒落ていて自然に笑みがこぼれた。

福原毅

会場となる二階の座敷に入ると全員がマスク姿。窓際の席に着くと、換気のため少し開けたガラス窓から冷たい風が吹き込んでいた。ダウンコートを着たまま、お店の方が用意してくれた膝掛けを足に巻き付け、もちろんマスクもぴっちりしての鑑賞となった。

でも、布咏先生が登場して三味線の音が座敷に響いたとき、寒さも、このところの不安や緊張も全てが頭から消えた。

つくづく三味線とは不思議な楽器だと思う。きちんとした曲、旋律を形作っていなくても、チン、トーン・・・と爪弾かれる音が耳に届くだけで、聞く人は独特の世界にいざなわれる。それが、芳町亭のような日本家屋の粋を集めた空間の中にあっては尚のこと。チーンと響く一音だけで、現にはない一つの世界がそこに広がった。

その上に、布咏先生のあの声！「あぁ、あんなふうに唄いたい」そんなことを口にすれば先生には「百年早い！」と言われるのがオチだが、入門して十二年、憧れはどんどん強くなる。稽古のたびに、どうしたらもう少しマシな唄になるのかと思い続けていたせいもあろう。私は先生と一緒に（声にならない声で）、唄っていた。「ほどほどに」「柳橋から」「玉川」と、曲がりなりにも稽古したことのある曲が続いたせいかもしれない。マスクをして見えないのを良いことに、私は布咏先生の口に合わせて口を動かし、首を傾け、一緒に大きく息をしていた。

最後の「柳やなぎ」は心に染みた。梅にしたがい桜になびく・・・気儘にも見える暮らしではあるが思うに任せぬ世界に身を置く芸者の心情が切々と描かれる美しい上方唄。ゲストの服部真湖さんの舞姿も哀しく美しかった。

私は唄い出しの「や～」が聞こえたところで、すっ

ぼりその世界に入ってしまった。やるせなさ、切なさ、愁いといった感情が一気に私を満たしていた。一つの音だけで、こんなにも思いを表現し、聞く人の心を揺さぶることができるものなのか。その唄は一つ一つの音が色を持ち、感情を持っているとさえ思えた。

あの日から一月以上が経った。コロナ感染はとどまるところを知らず、状況は厳しさを増している。布咏先生との稽古も無くなった。

自宅で自習したい曲を尋ねられたとき、私は厚かましくも「柳やなぎ」をお願いした。三味線を手に取ると、あの日の光景が蘇る。導いてくれる師が傍らにいないことのもどかしさを感じつつも、一つ一つ手探りで唄に向き合っている。穏やかな日常が戻り、存分に稽古をつけてもらえる日が、一日も早く来ることを祈りながら。

オンライン稽古、ついにはじまる。

己紗　咏治

「人新世」（アントロポセン）という言葉がある。約四十六億年前に地球が誕生して以来、この惑星は数千年や数万年、ときには数億年という途方もない周期で温暖期や寒冷期が入れ替わり、その間、さまざまな生物が発生しては進化、繁栄、絶滅を繰り返してきたわけだけれども、地質学的にいう「更新世」の最後の氷河期が終わった約一万年前から現在までを「完新世」という。この「完新世」は気候的に非常に穏やかな時代で、約二十万年前に出現し地球上の覇権を握ったホモ・サピエンスが高度な文明を着々と築き上げていくにはまったくもって好都合な条件であった。

しかし、人類がこの惑星の主となり自然を開発、加工、ときには破壊し、それまでには存在しなかった有害な物質を生み出しては撒き散らし始めて以降、どうやら地球のコンディションが人間の営みによって左右されているのではないかという仮説が、昨今、世界中で有力視されるようになった。つまり、現代に生きるわれわれは一万年続いた「更新世」から、人間が地球に多大なる影響を与える新しい地質年代＝「人新世」に移行しつつあるのではないかということである。近年よく取り沙汰される地球環境にまつわる問題、特に世界的な気候変動などは単なるエコロジーブームとして片付けるのではなく、この文脈の中で捉える必要がある。

そして、この原稿を書いている四月二十五日（土）は本来であれば第五十九回「美紗の会のつどい」が行われていた日であり、新型コロナウイルスの蔓延による緊急事態宣言をゴールデンウィーク明けに解除できるか否かの瀬戸際、まさにの正念場である。世界中で猖獗を極めているこの新型コロナウイルスも、ある意味では、「人新世」的な地球規模の災厄と言えなくもない。動物由来の多くの感染症はつまるところ人間による豚や鶏の家畜化、つまり、人間と動物が自然状態ではあり得ない近い距離で暮らすようになったことが遠因であり、ウイルスの伝播は不自然に人が密集する都市という人工的な空間によって加速され、自動車や鉄道、船舶、飛行機という文明の利器によって易々と国境を跨ぎ超えていく。

今回の新型コロナウイルスによる世界的な混乱は、急速に進展したグローバリゼーションの副産物とも言えるのではないだろうか？

とはいえ、単純に時計の針を巻き戻して人類が文明を捨て、自然の懐に還ってゆけば万事は解決、事態は好転するのかと言えば、そんなことはどだい無理な相談だろう。「人新世」がこれまでの時代と異なるのは、人間が自分たちの技術によって生み出してしまった苦境や弊害に、自分たちの技術でもって対処し、あわよくばその災厄を克服していけるということである。私が勤務する大学も五月十一日からいよいよパソコン（もしくはスマートフォン）とインターネットを使ったいわゆるオンライン授業に踏み切ることになった。おかげで教員も学生も大混乱の極み、まさにパニック状態である。はたしてこの試

みがどこまで上手くいくのか、どんなトラブルが待ち受けているのか、現状誰もわからないし予想もつかない。しかし、自分たちが駆使できる技術を動員し、知恵を絞ってやってみるしかない。

そして、外出の自粛が要請され始めた四月から、師匠との稽古もついにオンラインとなった。たいていい師匠くらいの年齢の方は（失礼！）パソコンやインターネットなどというと拒絶反応を起こすケースが多いのだが、うちの師匠は案外（再び失礼！）そうしたものにも抵抗がなく、Macもお持ちだったりするため、「ZOOM」というビデオ会議用のソフトをインストールしていただいて、ディスプレー越しの遠隔稽古が始まった訳である。あいにく「ZOOM」はオンラインで打ち合わせをしたりするためのシステムだから、三味線の音が出ているときには唄の音量が小さくなってしまったり（つまり、発言者の音声にフォーカスしようとしてしまうのである）、合わせ稽古の時などには不都合は多々あるが、こんなご時世だからといって何もしないよりは断然いい。

古典芸能とデジタルテクノロジーという一見相容れないような二つの存在が、この非常時に手を携えてしまうというのはなんとも現代的というか、現在的な出来事のように思う。この「たより」が刷り上がる頃、新型コロナウイルスをめぐる世界の状況、国内の状況がどうなっているかはわからない。ひょっとすると相変わらずオンラインでの稽古が続いているのかもしれないが、もしそうだとしたら、きっと師匠も弟子であるわれわれも含めて、遠隔稽古のコツやツボがいまよりも掴めていたりするのかもしれない（しかし、出来ることなら一日も早く対面での稽古が再開できるといいですね）。

《今後の予定》

◎六月六日（土）
第五十九回　美紗の会のつどい
赤坂クラブ　十三時より　未定

◎九月五日（土）
第十回　萠の会
西松布咏　幽玄に唄ふ
鶴間邸　十七時より

◎九月六日（日）
萠の会　プライベートコンサート
鶴間邸　十一時より

◎十一月二十九日（日）
第六十回
美紗の会のつどい記念演奏会
神田明神文化交流館４階・令和の間

■たより 第91号
発行者　美紗の会
編集責任者　照沼 太佳子
デザイン　近藤 幹則

■美紗の会
主宰　西松 布咏
稽古場　港区白金台三-一-二
白金台プレイス三階
電話　（三四四一）一一七二六
（五四四七）一一四一一
E_mail：nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www.misanokai.com/